

それは出会いから始まった

■東京オリンピックの女子選手村にて■

私が学生だった1960年代、女性の就職差別は、障害者差別ととてもよく似ていました。進歩的と思われる朝日新聞でさえ、就職案内に「男子に限る」と堂々と書いていたのですから。

そんな中で、私が記者になることができた理由はとても単純です。卒業の翌年に、東京オリンピックがあったからです。

「オリンピック報道の華は、女子選手村」と各新聞社の編集トップは考えていました。ところが、そこは、男子禁制の世界です。「他社に負けるわけにはいかない」「仕方がない。女をとるか」ということになったようで、どの新聞社も1963年だけ、“瞬間的に”、門をあけたのです。

現金なもので、翌年、再び扉をピタリと閉じてしまいました。

こんないきさつから、64年秋の東京オリンピックの女子選手村には、日本中の女性記者が勢ぞろいすることになりました。その中に若き日の堂本暁子さんがいました。

告白しますが、私は英語が大の苦手です。そこで、入社試験をドイツ語で受けました。試験官は“錯覚”してくれたようです。「ひとりで、英語とドイツ語と両方使える女、これは便利だ」と。新聞記者に向いていそうな女性たちが何100人も受けていたので、私はすっかりあきらめていました。にもかかわらず、50人近い同期の中のたった一人の女として採用されたのは、英語が苦手だったからという不思議な理由からだったのです。

一方、堂本さんは、私とはまるでレベルが違いました。アメリカで生まれ、英語が堪能。大学卒業後、米国大使館でラジオ番組制作に携わっていました。そこをラジオ東京（後のTBS）にスカウトされ、オリンピック当時は、外信部に所属していました。

堂本さんが、その後、「ベビーホテルキャンペーン」で日本新聞協会賞や放送文化基金賞・民間放送連盟賞などを受賞したことはよく知られていますが、ジャーナリストとして凄いことは他にもあります。精神病の人たちが顔を出して登場する番組をつくったのです。

当時は障害者といえば匿名あつかいでした。車いす利用の人でさえ、写真は後ろ姿か、ボカシを入れるのが常識でした。結果的に、「障害は隠さなければならない恥ずかしいこと」という偏見を強化することにつながってしまいました。

堂本さんは、この状況を変えようと、大胆にも、精神病を病むご本人にテレビに登場し



てもらふことに踏み切りました。

1987年1月18日、TBSテレビの報道特集「人間らしく生きたい」が放送されました。精神分裂病と当時、呼ばれていた人々が堂々と名を名乗り、画面で思いを語りました。

北海道・浦河「べてるの家」の統合失調症当事者がテレビに登場するより、20年も前のことです。国際的にみても画期的なことでした。担当ディレクターの堂本さんの熱い思いと、精神病当事者の堂本さんへの深い信頼があって初めて可能なことでした。

私は感動し、尊敬する先輩として遠くから眺めていました。

それから、14年もたったある日、憧れの堂本さんから突然、電話がありました。

「千葉県庁で勉強会をしたいので、福祉について講演していただけないかしら」。

その年、2001年の4月、堂本さんは、千葉県知事になっていたのです。そして、私が朝日新聞で、貧しい日本の高齢者福祉、障害福祉をなんとかしなければと奮戦している姿を、長年、遠くから見ていてくださったのです。

またまた告白しますが、私は、英語苦手だけでなく、人前で話すのも苦手です。そこで編み出したのが、2台のスライド映写機をつかう方法です。一方のスクリーンに、人間の尊厳を踏みにじっている日本の福祉現場や医療現場の映像を映し出します。そして、もう一方のスクリーンにノーマライゼーション思想が根付いている北欧や、理想に向かって実践を重ねている日本の現場を映します。こうすると、口下手な私でも、聴衆のみなさんの心に何かの変化を引き起こすことができるようなのです。

当時、県庁の障害福祉課長だった高柳哲男さんは、こんなメールをくださいました。

「一つの大きな方向性を見つけることができました。講演をうかがってから間もなく、課員共々、雲仙の視察・調査に出向き、そこで、見、聞き、感じたことで、担当課長としての為すべき柱が出来上がったような手ごたえを覚えました。事業団改革(巨大入所施設の改革)、障害者の地域移行を支援するためのシステム作り、この二つのテーマがその中心です。」

「雲仙」というのは、日本の知的障害分野の最先端を走っていた田島良昭さんたちの「コロニー雲仙」のことです。重い知的なハンディを負った人々を、施設に「収容」するのではなく、町の中へ、そして、仕事や恋や結婚も、という夢を現実にしつつあったのです。

■消えた課長補佐と、100年ぶりの伝染病予防法改正■

このころ、健康福祉政策課政策室長に、毛色の変った人物が着任していました。一度は役人生活に見切りをつけた野村隆司さんです。

野村さんと私もまた、不思議な縁で結ばれていました。

公衆衛生審議会伝染病予防部会基本問題検討小委員会という、おそろしく長い名前の小委員会の私が委員、野村さんが事務方の医系技官、厚生省課長補佐という出会いです。

1997年のことでした。

日本の伝染病予防法は1897年に制定され、ほとんど手を加えられずにいました。それを改正するための委員会と聞かされた私は、「100年目の改正なのだから、根本的な見

直しをするチャンス」と真っ正直に受け止めました。

「これまで放置されてきた院内感染に取り組むべき」とか「強制しなくても、入院したくなるような感染症病棟にすべき」などと提案しました。

ところが、厚生省は、「根本的見直し」の提案など、迷惑この上もなかったのです。海外でエボラ出血熱やマールブルグ病などにかかった人が帰国したら、本人が拒否しても強制入院できるようにする法改正がねらいでした。

つまり、後の「千葉方式」とは180度違う委員会だったのです。法改正の中味はあらかじめ役所で決めてあり、それに、肩書の立派な、専門家といわれる人々にうなづいてもらう、儀式の一種だったのです。

そんな場に、場違いな私が呼ばれたのは、入社試験のとき同様、錯覚によるものでした。

このころから、役所は、委員会に「市民」や「女性」を入れなくてはまずい、という空気が流れ始めていました。朝日新聞論説委員というもっともらしい肩書があって女、一見、物静かに見える私は、アリバイづくりに一石三鳥に思えたようです。

ところが思惑が外れて、私が筋書きにないことを持ち出して引き下がらないのですから、事務局は渋い顔です。その上、主張が通らないとなると、小委員仲間の弁護士、光石忠敬さんたちと一緒に、上申書を出したり、記者会見をしたり……。シキタリ破りに事務局は、苦り切っています。

その中でただ一人、口には出さないけれど、患者の立場に立った私の意見に同感してくれていると私が感じる事務局メンバーが一人いました。それが、野村さんでした。

野村さんは、その前の老人保健課時代、私のキャンペーンを受け止めて「寝たきり老人ゼロ作戦」つくってくれた人々のひとりでもありました。

数年後、その野村さんが、「突然、厚生労働省を辞めた」という噂をききました。私はショックを受け、探し回りました。そして、千葉県内の保健所で、一人の医師としてひっそり仕事をしていることを知り、一度会いたいなあと思っていました。

一方、保健所に潜んでいた野村さん、堂本県政のもと、海外で磨いたその能力を“発見”されてしまい、保健所から県庁の政策室長に。そして、なんと、「千葉県21世紀健康福祉戦略検討委員会の座長になってください」と依頼しに私の前に現れたのです。

■「食品添加物を怖がるならば、北欧の高齢福祉に目を」と挑発■

こうして野村さんと再会したとき、私は、「ぜひとも引き合わせたい人物がいるの」と言いました。社会福祉法人・生活クラブの理事長、池田徹さんです。

池田さんとの縁は、1990年、ぶどう社から出していただいた『「寝たきり老人」のいる国いない国—真の豊さへの挑戦』でした。

「西暦2000年、わが国の寝たきり老人は100万人になる」といわれているけれど、高齢化の先輩国には「寝たきり老人」という言葉がない、概念がない。日本にいたら「寝たきり老人」と呼ばれる身になる人が、起きて車いすに乗り、お洒落して外出も楽しんでいる、その秘密は、カクカクシカジカ……と書いた本です。

この本を読んだ池田さんから講演を依頼された私は、例によって映写機2台を用意していただきました。一方にベッドに縛られている日本のお年寄り、寝かせきりにされているお年寄り、もう一方に、半身不随になっても、認知症になっても、尊厳を尊重されているデンマークの笑顔のお年寄りを映しました。そして、生協の面々を挑発しました。

みなさまは、食品添加物の危険を訴え、「食の安全、安心」を主張してこられました。でも、それで長生きしたとして、こんなむごたらしい人生の最後が待っているのをご存じですか？ 「老いの安全、安心」が確保されていないというのに、立ち上がらないのですか？

池田さんたちは、ホームヘルプ事業を始めました。日本最先端の個室ユニット型の特別養護老人ホーム「風の村」をつくり、日本の高齢福祉をリードする存在になっていきました。

この池田さんと、米国で感染症についての深い知識を身につけ、英語も堪能なお医者さんなのに、それを決して表に見せない野村さんを引き合わせたら、きっと何かが生まれる、と直感したのでした。

■そして、ニワトリ、ネコ、犬、ロバが出会いました■

ところが、ふたりとも乗り気ではありませんでした。

「ゆきさんは褒めるけど、しょせんはお役人でしょ」と池田さんはいい、野村さんは「NPOの人は、実現性を無視して理想ばかりを語るの。。」と疑っていたようです。

ふたりがやっとのことで会ってくれたのは、2002年6月、幕張の、とある居酒屋でのことでした。

その後は、急転直下。夜通し語り合った二人は、“仲人”の私そっちのけで、夢を語り、実現の方策練る同志的存在になっていったのです。

ここに、加わったのが、野沢和弘さんです。

野沢さんは、毎日新聞の敏腕記者です。数々の特ダネや著書を読んで、私は尊敬していました。でも、初めて会ったのは、池田さん・野村さんの居酒屋の出会いの2カ月後、2002年の8月、場所はやはり、居酒屋でした。

その日、緊急シンポジウム「入所施設はもう作らない 新障害者プランを！」が開かれ、私はコーディネーター、野沢さんはシンポジストでした。そして、二次会の居酒屋で、偶然、となりの席に座ったのです。そのときのことを、野沢さんは『条令のある街』（ぶどう社）に、こう記しています。

〈大熊由紀子さんと二次会の席で偶然、となりあわせになった。「千葉に住んでいらっしやるの。千葉を変えるプロジェクトに力を貸して下さらない」

どのように答えたかは、もう忘れてしまった。気がつく、その日から新たな出会いが始まり、それまでの新聞記者の仕事をしていただけのではとても体験できない、いくつもの出来事に遭遇することになった〉

第4の男、細渕宗重さんと出会ったのは、野村さんが立ち上げ、私が座長役をつとめた「千葉県21世紀健康福祉戦略検討委員会」の席でした。

現場を大事にして生きてきた人ならではの発言に私はすっかり惚れ込んでしまいました。

委員に推薦したのは、当時の障害福祉課長の高柳さんでした。「なぜ、細淵さんを推薦したのですか？」と尋ねたら、優秀なお役人の常として、理路整然としたメモをメールで送って下さいました。そのまま、ご紹介します。

「野村さんから、戦略検討委員会の委員を、障害者支援の分野から推薦してほしいと依頼され、誰を推薦するか悩みましたが、以下の視点で絞り込みました。

- ・3障害にわたって現場の経験、知識を有していること。
- ・グループに属していない、謂わば一匹狼的な存在であること。
- ・仕事を通じて責任感と信頼感があると思える人。
- ・一般的に誰もが納得のいく選択だと思える人

そして、ロザリオの聖母会・専務理事の細淵さんが適任であると判断し、内々説得をしました。」

池田さんは、外からみるとダンディな紳士にしか見えないのですが、人工膀胱と人工肛門をもつ障害当事者です。野沢さんは重い自閉症の子息のお父さんです。細淵さんは支援の現場のプロ。そして、野村さんは厚生省から熊本に出向していたときに水俣病の当事者に出会い、人生観が変わったというホンモノの行政官です。

こうして、ロバ、イヌ、ネコ、ニワトリのブレーメンの仲間が勢ぞろいしたのでした。

■計画は、作ることよりも、実行することに意味が■

翌2003年5月27日、たぶん日本初の「ほんものタウンミーティング」が、旭市にある国保旭中央病院の大講堂で開かれました。身動きの取れないほどの人が集まりました。「立錐の余地がない」とはこのことをいうのだろうというほどの熱気でした。

せいぜい150人、でも、もし幸運の神が微笑んだら、と多めに準備した550の資料があっというまになくなりました。その後も入場者が続き、スタッフは、資料をもらえなかったのです。会場での意見11人、事前の意見・提案42人、事後の意見・提案82人。ひとつのタウンミーティングだけで、合計135にのぼりました。詳しくは、この章の川副泰成さん、大和田幸子さんの報告をお読みください。

この1カ月ほど前、4月14日、堂本知事は記者会見で「千葉県地域福祉支援計画」の骨子案示し、県民みんなの意見を反映するひとつの方法としてタウンミーティング方式を提案し、主催する団体の公募を発表しました。旭市に住む人々は、これにいち早く応え、一週間後の4月22日には準備会を開き、翌23日には県に「地域福祉支援計画タウンミーティング開催申請書」を提出。実行委員会の構成も膨れ上がりました。

わずか一ヶ月の出来事でした。

タウンミーティングはその後、全県下で次々に行われ、続く第三次千葉県障害者計画や次世代育成支援計画など千葉県の計画作りの伝統になっていきました。

細淵さんの数々の功績の中でも画期的なのは、障害者計画をつくる委員会での、前代未聞のこんな提案でした。

「私たちに、本当にこの試みに参加せよというなら、計画の策定作業が終了した後もこの委員会を存続させるべきです。計画を作ることよりも、それを実行することに本当の意

味のあるのですから」

国も県も市町村も、行政はたくさんの計画を作ってきました。委員会をつくっては報告書を受け取ってきました。けれど、それらは「作るために作る」のが現実でした。

ですから、提案した細渕さん自身、「きっと却下されるだろう」と密かに思っていたようです。ところが、この提案が通ったのです。細渕さんはいいました。

「県はこの提案を認めるどころか、明記したのです。国・県・市町村を含めて日本で初めてのことです。千葉県が単なる見せかけではなく本当に真剣に取り組んでいることを知りました。健康福祉千葉方式の“進化”と“深化”です。健康福祉千葉方式は固定的なものではなく今後も進化を遂げていくものであること目の当たりにしました」

細渕さんが、もうひとつ驚いたのは、地域福祉支援計画の中で提案された「中核地域生活支援センター」14ヶ所に整備の予算がついたことでした。全県一斉に、です。

この種の事業は、何ヶ所かずつ、何年かにわたって整備が進むのが普通です。しかも前年比30%減の予算が組まれていたときに、まったく新しい予算を全県下に作るのですから、なおさらのことでした。

「千葉県の福祉は変わる」と多くの人が確信した瞬間でした。

■千葉の宝たちがつながった■

千葉方式の牽引車になった4人が、どのようにして出会い、つながっていったかをご紹介します。この他にも、数えきれない宝のような人々が、次々と縁を結んでいきました。池口紀夫さん、大和田幸子さん、渋沢茂さん、名川勝さん、五十嵐正人さん、朝比奈ミカさん、伊藤英樹さん、座談会にでてくださった方々……。

県外の方に結んでいただいた縁も少なくありませんでした。

この章に、インターネット名人兼精神科医の立場から原稿を書いていただいた川副泰成さん。縁の始まりを見つけようとパソコンの記録を検索していたら、2001.7.25.未明の新潟県立小出病院金子晃一ドクター発のこんなメールが見つかりました。

「ゆきさま、“千葉県の福祉政策に加わっていただけそうな志高き精神科医”についてのお尋ねにお答えします。川副泰成氏（国保旭中央病院 神経精神科）を紹介させていただきます」

悲しいことが1つあります。縁結びしてくださった、金子さんが、この直後、過労がたたって若くしてクモ膜下出血に倒れたことです。千葉方式の成果をお伝えしたくても、もはやお分かりにならない状態になってしまわれたのです。

嬉しいこともあります。この章の執筆者のおひとり、竹林悟史さん。

関西育ち、もとはといえば厚生労働省から、障害福祉課長として出向してこられたのですが、千葉のトリコとなり、千葉に家を買って永住する決心をしました。そして、千葉生まれの、あやねちゃんまで授かったのです。

『ブレーメンの挑戦～新福祉論が目指すまちづくり』（ぎょうせい）

第2章 第1節（大熊由紀子執筆）より